

Nara Women's University

トレス海峡における真珠貝漁業補償 — 漁場図を中心に —

メタデータ	言語: 出版者: 奈良女子大学文学部地理学・地域環境学研究報告編集委員会 公開日: 2011-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本,博之, 城谷,勇 メールアドレス: 所属:
URL	https://nara-wu.repo.nii.ac.jp/records/2000587

トレス海峡における真珠貝漁業補遺

—漁場図を中心に—

松本博之・城谷 勇

1. はじめに

近年ずいぶん緩和されたのであるが、1975年 はじめてトレス海峡に足を踏み入れたおり、行政中心地木曜島の社会空間は人種差別が露わにみられる世界であった。アングロ・ケルト系、アジア系、先住民系の居住空間のセグリゲーションが顕著であっただけでなく、ホテルに付属したパブのコーナーでも、カウンターの止まり木に座れる者、別室の隔離された部屋を占める者、パブの空間内に居場所はなく横の窓口からアルコールを買って別の場所で飲まなければならない者の区別はあからさまであった。1つの運搬船に乗り込んでも、船室を占める者、不安定なエンジンの上に陣取る者、さらには風波をまともに受ける船首部分の空間を占める者といった区別。あるいはまた、同一の職場であっても、トイレやシャワー設備が別個に準備されていたのである(松本 1981)。

そうした状況や戦前木曜島では先住民の夜間滞在が許されなかったためか、先住民の居住する他の島々の中で暮らしていると、町場である木曜島を総称としてマルカイ・ラグ(白人の島)と呼ぶスラングが聞かれたし、木曜島内の商店や場所にしても島民たち独自の呼び名によって切り取られた地理像が浮かび上がってきたのである。マルティ・エスニックな社会において、それぞれのエスニック・グループは一見同一の空間で暮らしているようにみえても、必ずしも空間に同一の意味づけをしているのではなく、それぞれ周辺部で交錯しながら同一の空間に二重、三重の生を描き出す社会空間が存在したのである。それ以上に興味深かったのは、彼らを取り巻いている海洋世界であった。サンゴ礁や砂堆の発達する海峡において、居住島周辺の海域には、陸上と同様に、島民たちは無数の海底地名を与えていたのである。彼らの日々の活動である海上航行、漁労、狩猟といった行為から当然予想されたところであったが、それらは地名というよりも、その場所におけるさまざまな行為から生まれる経験世界についての豊富な知識をふくむものであった。それゆえ、「環境の認識」は単に静的な知識というよりも、人間の生(行為)と裏腹な関係にあるコインの両面のようなものであり、人の存在に不可欠なものという印象を強くした(松本 2003)。そうした先住の人びとの海洋環境に関する地理像が鮮明化するにつれ、トレス海峡の他の民族はどのような地理像を構成しているのか、あるいは構成していたのか、私の頭の片隅に常に巣食ってきたのである。海の世界は陸上と違ってその痕跡をほとんど残すことなく、公的な海図や地形図の上に書き留められることはない。

オーストラリアの最北端ケープ・ヨーク半島とパプア・ニューギニアの間のトレス海峡にマルティ・エスニックな社会が形成されたのは、19世紀後半以降、1世紀に亘って植民地産業としての真珠貝漁業が展開したからである。そこには、元々メラネシア系の人びとが暮らしていたが、真珠貝漁業の展開を契機としてオーストラリアへの入植者アングロ・ケルト系ばかりか、その労働者として南太平洋系やアジア系の自由移民や契約労働者が流入したからであった。

この真珠貝漁業において1890年代後半から第2次大戦までその労働力としてほとんど独占的な地位を占めたのは日本人、とくに和歌山県南紀からの契約労働者の人たちであった。彼らは第2次大戦の勃発に伴って、オーストラリア南部の強制収容所に収監され、そのほとんどは大戦後日本に強制送還されたのである。その時点で真珠貝労働に携わった日本人のトレス海峡の海洋世界の経験は引揚者の記憶の中に仕舞いこまれたわけである。

ただ、自由移民時代の渡航者の系譜を持つか、第2次大戦前にその地の人間と結婚していたわずか10人足らずの日本人が戦後木曜島に戻ることを許されたのであった。その中に藤井富太郎という和歌山県西牟婁郡串本町有田出身の人物がふくまれていた。1975年にはじめてトレス海峡を訪れたわれわれを木曜島で迎えてくれたのは当時70歳近いその藤井富太郎氏であった。それ以来30年余り、その日系二世の家族との付き合いが続いてきたのである。藤井富太郎氏は1986年に亡くなられたが、その娘さんや息子さんたちが父親の伝記を作りたいという希望で2008年初秋に来日し、父親の故郷を訪問することになった。短期間の滞在であるから、私自身まえて多少の下調べをしておくことにしたのである。その過程でお会いできたのがかつて藤井富太郎氏と同じ船で真珠貝漁業に従事しておられた有田在住の城谷勇氏であった。2007年にはじめてお会いしたとき、すでに齢85歳を数えられていたが、戦前の真珠貝漁業に関して極めて鮮明な記憶をお持ちであり、かつ自らも郷土誌『ありだ』に収容所時代やトレス海峡での日々の生活の思い出を書いておられた(城谷1993)。私自身、戦前戦後に亘って名だたるダイバーの一人であったと言われる藤井富太郎氏がふと漏らされた「真珠貝のダイバーなど、つらい仕事するものやない」という言葉を耳にして以来気にかかっていた真珠貝漁業に従事された人びとがトレス海峡の海洋環境をどのように認識されていたのか、城谷氏からその一端をうかがうことができた。戦前の真珠貝漁業の経験者の方も残り少なくなっており、ここではその聞き書きと城谷氏の既発表の文章から、その一面を復原しておくことにした。

ところで、日本人による真珠貝漁業の出稼ぎの移民史については、すでにこの海域におけるトピックとして数多の研究がある(大島1927, 和歌山県1957, シソンス1974, 小川1975, Sissons1979, 久原脩司1983, Ganter1994, Shnukal2004など)。私自身当面そうした歴史的な過程を復原することに関心はない。ただ、それらの文献においてもかつての従事者への聞き書きから、艱難辛苦をきわめた洋上生活の模様や潜水作業について一部触れられているが、トレス海峡の激しい潮流と強い風と日射にさらされる海洋環境を考慮に入れた記述をほとんど見出すことができなかつた。それにまた今日、ディアスポラ、あるいはトランスナショナルというキーワードにおいて旧来の移民にも新たな焦点をあてられているが、そうした移民が移住先において自らの生活形態を通してどのような環境世界を構築していたのか、どのように在地の素材を自らのものとして組み立て直していたのかという視点からの接近も行われてこなかつたようである。ここではそうした視点の有効性を検討する意味もこめて、日本からの真珠貝漁業従事者が大半の時間を過ごした海洋環境の再構成という一面に焦点を当ててみる。その活動した漁場のあり様やそこで開発され適用した技術、さらにはその労働編成が移住先のみならず出身地の母村においてはどのような意味を持ったのかについて言及することになるが、この小文は移民史研究の欠を補うという意味で補遺とした。

2. 真珠貝漁業の漁場図

トレス海峡は南北 160km、東西 250km ほどの海域である。水深は浅く、西部で 10m、東部のグレート・バリア・リーフ近くで 90m ほどであり、平均すれば 30m 前後である。ほぼ南北中央に南緯 10 度線の走る熱帯で、サンゴ礁の発達が著しく、東部のグレート・バリア・リーフの障壁もあって、トレス海峡は熱帯海洋生物の生息地および繁殖場になっている。

しかし、熱帯の浅海域であるからといって、トレス海峡のどこにでも真珠貝（シロチョウガイ）が棲息していたわけではない。それに強い南東風や北西季節風、サンゴ礁や砂堆の発達する複雑な海域では潮流の激しい箇所もあり、海面の潮流と水面下の潮流も必ずしも一致するわけではなく、また海底の岩礁やサンゴ礁にエアパイプやライフライン（命綱）の絡まる箇所も多く、さらに海棲の鮫やワニの危険も避けなければならず、真珠貝漁業の操業海域は限定されていたのである。明治初期からの真珠貝漁業の展開、ことに潜水服や潜水装置の開発に伴って漁場は変化したのであろうが、ここで主に復原するのは城谷氏の記憶にあった昭和 10 年代の日

表1 深度別にみた真珠貝漁業者の操業船数(1941年4月)

会社名	借船数	船名		
		深水ボート	中水ボート	浅水ボート
BP.ワイベン	10	セプトン, ガートン, モルトン	バントン, ゴルトン, フロリア, ミルトン	ケルシア, キャンディア, メルシア
ボーデン	8	シドニー, ミネルバ, HB, グリア		ウイロウ, テセル, トレニア, ベラ
クリブランド	8		バイキング, ワイマテ, ワイカレ	ワイタロ, ワイカト, ハウラキ, ハク, ワイパ
カーペンター	6		トレス, アダリナ, コーリン	ゼナ, アタリ, ジョゼン
ワネッタ(ホーキング)	3		ケステル, ウイジョン	オプスリー
ヘネツシ	3	マストン, フェルトン, ケリリ		
モーリー	2	アリダ	テルマ	
シンクレア(チャリー)	1			キシユウ
ファークア	1			チャーム
計	42	11	13	18

(城谷 1993 の文献 11-12 頁の記述を編集)

本人による真珠貝漁業最晩期の状況である。そのころのトレス海峡の真珠貝漁場については、記録の上で「ダーンリー・ディーブ」、「バトー沖」、「サンパン沖」、「北の沖」、「メンドン沖」という名称のみが報告されていた(高山 1937)。また、その漁場名だけではなく、貝の生息や貝質には海底地形や地質および植生が深く関係しており(和田 1953)、ダイバー

たちの間では、ほとんど真珠貝のみられない「猫の糞場所」や「ビスケット場所」、最も貝の多い「稲草場所」や「菊場所」など、巧みな表現もみられたという（小川 1976）。さらに、私個人としても、城谷氏に出会う前 1998 年に、書簡を通じて新宮市三輪崎の小芝菊松氏に少し漁場名の記憶を探ったことであった。そのとき、興味深かったことは木曜島以外に給水や薪の準備、それに荒天時や大潮時に立ち寄った島もふくめて、15 ほどの海峡域の真珠貝漁場名を教えていただいたのだが、先の高山の報告にふくまれていた漁場名とはほとんど重ならなかったのである。その時は時代による操業漁場の違いかと思っていたのだが、城谷氏にお会いしてその理由が判明した。

日本人の間で、操業域の深度による分業化が進んでいたのである。和歌山県南部から多くの出稼労働者が「タースデー（木曜島）」に出かけるようになった 1890 年代当初からすでにその傾向をもっていたのかもしれないが、オーストラリアの移民制限法やそれを緩和して雇い主の「招請状（呼び寄せ）」を有することが義務付けられて以後、彼らは木曜島在住の親族や知人の紹介無しには渡航することができなくなった。雇い主へは操業のリーダー（親方）である責任ダイバーの推薦が必要であり、そのために和歌山県よりもっと小規模の同一出身地（村）による操業船の労働編成が一般化したのである。すなわち、木曜島のボーディング・ハウス（寄宿舎）の構成にあるように、和歌山県内は東の三輪崎から西の周参見まで、そしてそれ以外は県単位に伊予（愛媛）と広島もふくめ、都合 8 つのグループに分かれていたのである。

それらは、採貝従事者の言葉をつかえば、深水（ふかみず）ボート、中水（なかみず）ボート、浅水（あさみず）ボートに分業化していた。先にも述べたように、海峡域はほぼ東西方向

表2 各ハウスの借船数・人員(1941 年4月)

ボーディング ハウス名	借船数	所属員数
串本	3	39
上野	8	41
出雲	3	18
周参見	10	68
宇久井	4	33
三輪崎	8	66
広島	3	18
伊予	3	24
計	42	307

で水深の違いがあった。西で浅く、東のグレート・バリア・リーフに近づくにしたがって水深は増加する。そのため、浅水・中水・深水の漁場はそれぞれ、図 1 に示したように、おおそ南北方向に位置していたのである。それぞれの水深における海底での採貝作業、エアパイプによる送気やライフラインの扱い、海底でのダイバーによる作業にもなった操船のあり様、あるいはダイバーの身につける潜水服の違いまで、従事者たちの間で創意工夫が凝らされ、しだいに出身村ごとの労働編成による専門化が確立されていったのであろう。

すなわち、深水ボートは主に宇久井・串本有田・潮岬出雲の出身者によって操業され、水深

30 尋 (fathom ≒ 1.5m) ~ 40 尋の海底での操業である。中水ボートは水深 15 尋 ~ 25 尋の水域であり、新宮市三輪崎・愛媛・沖縄の人たちによって操業されていた。もう一つの浅水ボートは水深 5 尋 ~ 13 尋の水域で、周参見・潮岬上野の人たちが活躍した場所であった。三輪崎出身の小芝氏は中水漁場で活躍した人物であったから、彼が示してくれたものは中水漁場を中心とし、浅水ボートの操業者から耳にしたウエスア

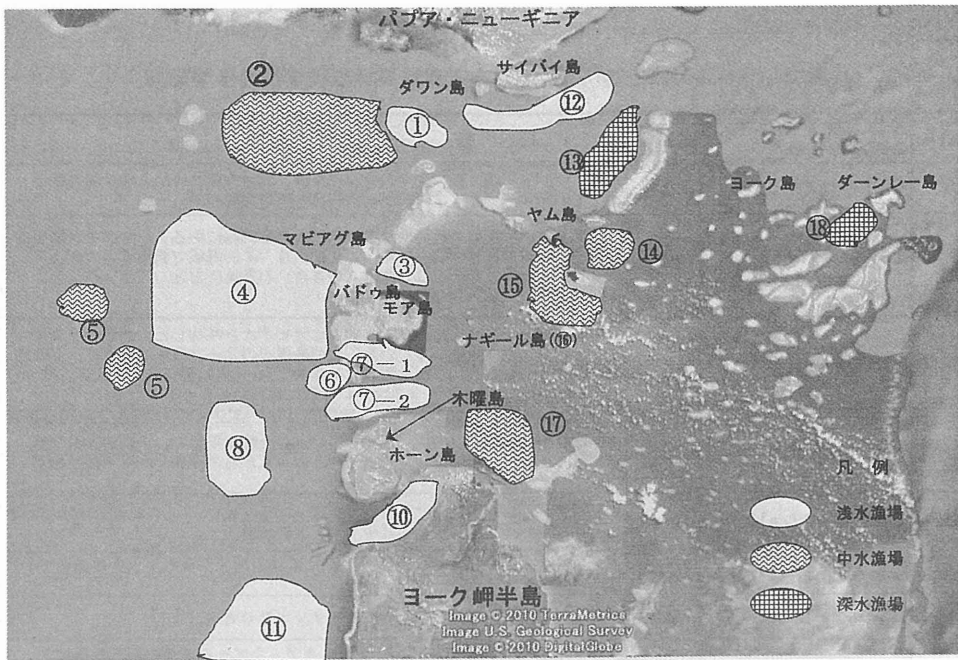


図1 トレス海峡の真珠貝採取漁場図 1930年代 (表3参照)

イラン、アラケタ、スモールレバーのような浅水漁場であった。城谷氏からの情報と並んで、2007年春の予備調査のおり入手した大正14年から昭和5年の6年間におよぶ周参見出身者瀧本庄太郎氏の日記によると、彼らの操業域はまさに「北沖」から、「マビオカ」、「バトー沖」、「ボビーの灯台沖」、「スモールレバー」、「メンダン沖」という浅水漁場に限定されていたのである。これらの通称は未測量海域の多かった当時の海図や地形図の英語地名、あるいはそれらの耳から入った英語から流用して簡略化したものや、「北沖」や「アカツパナ」のような日本人の間で工夫されたもの、川や岬のような地形的な特徴をとらえながら、操業行動に深く関係し、一種の位置確認であるヤマタテのための地方(じかた)の特異な地形(川や岬)からの距離にもとづいた「～の口」・「～の沖」という表現がなされていたのである。ただ、日記上の表記で興味深かったのはバトーが「馬頭」であったし、マビオカ(マビアグ)は「マビ岡」であったし、レッド・ポイント(Red Point)は「アカツパナ」であった。耳から入る日本人の間での通称はそのようであったのであろう。私自身が戦後の1975年藤井富太郎氏にお会いしたとき、確かに彼も「バトー」、「マビオカ」と呼んでいたことは事実である。城谷勇氏は5年あまりの経験であったが、当初は浅水漁場、それから中水漁場、最後の3年間は深水漁場での操業を経験され、その意味では、第2次大戦直前に利用されていた大方の真珠貝漁場の知識を有していた。ただ、一部中水漁場利用者の小芝氏が挙げられた「ケシアイラン」や「スモールマグロ」「カラツパアイラン」については、記憶が不確かであるか、不明であった。

「メンダン・パッチ(漁場)」と呼ばれたカーペンタリア湾、ヨーク岬半島西岸の浅水漁場は、南東貿易風が勢いを増す7、8月には風下にあたるので、周参見をはじめとした浅水ボートによって操業された水域であるが、瀧本氏の日記によれば、その漁場名や通称として「セキ

表 3 トレス海峡諸島における日本人真珠貝採取従事者の漁場認識

図中番号	日本人採貝従事者による通称漁場名	深度	摘 要
①	デフレン(レフレン)	浅水	バプア・ニューギニアに近く、サンパン沖、北沖漁場の掛かり場や休息基地となっていたターナゲイン (Turnagain) 島の周辺海域。
②	サンパン沖	中水	バプア・ニューギニア近隣のサイバイ島西南約28kmにあるターナゲイン島西方に広がる海域が通称サンパン沖。1940年7月、その海域で新漁場(ニュー・パッチ)を発見。発見者は三輪崎(新宮市)の芝崎久吉さん。サンパンとは Sand Bank である。(水深15~25m)
③	マビオカ	浅水	ジャビス島といわれたこの島を日本人はマビオカと呼称した。島民にはダイバー・ボートの乗組員が多かった。この島周辺のリーフ海域は浅水ボートの漁場(水深6~10m)。松本注: ジャビス (Jervis) は英語名。住民自らはマビアグ(Mabuiag)と呼ぶ。クリスマスに島民に招かれることもあった。
④	バトー(バドゥ)沖	浅水	水深5mのバドゥ島海岸から高度373mのモア・ピーク(バウダル丘)が水没するあたりまでの広大な漁場。水深5~10mの海底は平坦で、比較的安全な漁場。貝の生育が早く、良質。浅水ボートの古くからの漁場。バドゥ島は給水地。
⑤	コクリウ(コクショ)付近	中水	ボビー灯台の西北西30kmにあるクック礁(Cook reef)とその北西約20kmにあるクック洲(Cook shoal)は共に中水ボートの漁場。
⑥	ウエスアイラン	浅水	グディ島北北西約20kmにある無人島。この周辺海域が浅水ボートの漁場であった。(水深6~10m)
⑦-1	ロング・リーフ	浅水	バドゥ島・モア島南部の東西にのびるサンゴ礁の周辺。
⑦-2	アラケタ	浅水	ハモンド島北の汽船航路。プリンス・オブ・ウエールズ海峡から数条のリーフ(サンゴ礁)を経て、北に位置するホークスバリー(Hawkesbury)島間の海域を通称アラケタ・パチスと言った。アラケタはアリゲータ(ワニ)の訛り。浅水ボートの操業漁場で、イセエビによく似たニシキエビの多い所であった。(水深6~9m)
⑧	ボビの灯台沖	浅水	木曜島西方入口にあるグディ島西約19kmのボビー灯台海域の漁場。(水深7~10m)
⑨	オノ(ホーン)・アイラン		ホーン島。日本人はオノアイランと呼称した。ダイバー・ボートとは関係の薄かった島。しかし、プリンス・オブ・ウエールズ、木曜島と並んで、燃料のマングロープ伐りには出かけた。
⑩	スモールレバー(リバー)	浅水	豪州北端ケープ・ヨークとプリンス・オブ・ウエールズ島間の海域で、日本人は旧来からスモール・レバーとも呼称してきた。潮流の速い、海底の変化の多い漁場であったが、貝は良質であった。(水深7~10m)
⑪	メンダン(メインランド)沖	浅水	カーペンタリア湾、ヨーク岬半島沿いの陸地から約5km沖合一帯が採貝漁場だった。毎年7月から8月にかけて強く吹く南東の風を避けての操業場所で、浅水ボートが稼働した。ダイバーボートが近くに行くと、土着民(注: アボリジニ)が必ず「のろし」をあげた。魚類豊富な海域で、毒魚には注意を要した。(水深6~10m)
⑫	キタ(北)沖	浅水	サイバイ島からダナン島に至る海上線の南側海域で、10~11月の海上に風く時季に操業したが、収穫の少ない領域だった。また、海図に表示の無い砂堆がよくあり、操船には神経を使った。ダナン島で水補給や食料交換をやった。
⑬	ワツパ漁場	深水	1935年に発見されたこの漁場はワツパ・ニュー・パッチと呼ばれ、深水ボートが大量の真珠貝が水揚げした。(水深20~30m)
⑭	ドガ・アイラン	中水	ウォリア・リーフ南西にあるザガイ島周辺海域は中水ボートの操業する漁場だった。(水深15~20m)
⑮	ヤマ・アイラン	中水	ヤマ(ヤム)・アイランドおよびサシー・アイランド(別名ロング島)周辺とその南部海域は中水ボートの主要漁場であった。ヤマ島は非常に蚊や砂蟻が多い。(水深14~20m)
⑯	ナギ(ナギール)島		木曜島北北西約30kmにあるマウント・アーネスト島。ダイバー・ボートとは、各漁場の中継基地として島民との交流が深かった。
⑰	マンドルピン	中水	ヨーク岬東北部海域にあるマウント・アドルフス島周辺を日本人はこのように呼称した。中水ボートが操業する好漁場であった。(水深15~20m)
⑱	ダーンレー・ディーブ	深水	木曜島北東約80マイルに位置するダーンレー島南方に広がるカリー・リーフ群周辺が採貝漁場だった。水深40~60mが中心の海底地形の複雑さと潜水病の危険を伴う場所で、多くの日本人の若者が命を落としたところである。

スレバー（リバー）口」、「セキスレバー沖」、「カガトレバー沖」、「セブンレバー沖」など、半島部のカーペンタリア湾への流入河川や先に述べた「アカツパナ（レッド・ポイント、Red Point）」の岬をヤマタテに利用しながら、その沖合で操業していたのである。ヨーク岬半島先端西部とプリンス・オブ・ウェールズの間海峡はオーストラリアにとっては記念すべきクック船長がはじめてケープ・ヨーク半島の先端を東海岸から西に向けて通過し、ニューギニアとの間の海峡を確認して領有宣言を行った海峡であるから、彼の探検船の名をとって英語名では「エンデヴァー海峡」と名づけられているが、その潮流の速さのゆえにたぶん白人の航海士たちが名づけたのであろう、ダイバーたちの間では「スモールレバー（リバー）」と呼ばれていたのである。城谷氏によれば、潮流が速く、プランクトンが多いために貝の成長は良く、良質の貝が採取できたいが、操船には気をつけなければならず、長期にわたって操業されていたために、採貝量は多くなかったという。城谷氏に分からなかった「カラツパアイラン」は、瀧本氏の日記によると、浅水ボートが操業するそのスモールリバーから木曜島への航路の途上にあつた。

中水ボートはヨーク岬に近いマンドルピン（マウント・アドルフス島周辺）、海峡中央部ヤム島およびサシー（英名ロング）礁の南部からベット礁をふくむ「ヤマ・アイラン」漁場、それにウォリア・リーフ南西部ザガイ島周辺からダンジェネス礁をふくむ「ドガ・アイラン」漁場、さらに海峡北西部の「サンパン沖」が主たる漁場であつた。サンパンとは sand bank の短略である。木曜島に近いマンドルピン漁場は別として、他の漁場に出かけているとき、ヤム・ココナツ・ナギールの中部の島々が給水や「掛かり場」として利用されていた。

深水ボートは、その水深ゆえにかつて潜水病にかかる率が高くダイバーの墓場と呼ばれた海峡東端の「ダーンレー・ディーブ」で操業した。「ダーンレー・ディーブ」は通称として知られた名であるが、実際の深水の操業者たちの間では、ダーンレー島南部の「カレー・リーフ」を指していたのである。海峡ではもっとも東部に位置する漁場であるが、船足の速い船であれば、基地である木曜島から明るい内に漁場までの到着は可能であるが、船足の遅い船も同一行動を取るために、大抵中部諸島東端のヨーク島で一泊するのが通例であつたようだ。薄暮になると、サンゴ礁の多い危険な水域を航海できないからである。

このように日本からの出稼移民と一口に言われるが、日常的には漁場の水深の違いにより出身地による分業化が行われていたのである。しかし、ときおりニュー・パッチと呼ばれる新漁場が発見されることもあつた。それは中水と深水の中間的な水深の漁場が多い。浅水漁場は操業船数が最も多く操業時間も最も長いため、比較的くまなく漁場域を渉猟しているが、中水域のより深いところでは、ときには長きにわたって操業されていなかった区域もあるからである。城谷氏の記憶によれば、それが1935年に海峡中北部ウォリア礁の西側で発見されたのである。そこは「ワツパ漁場」とよばれ主に深水ボートが集中的に操業したのであるが、当初一隻1日当たり1トン（約1,000貝）の水揚げがあつたらしい。そこでの深水ボートの操業は1937年末まで続いた。また、第2次大戦開始前年の1940年にも中水ボートの一隻が大量の貝を木曜島で水揚げしたのを契機として、中水ボート船団の行動を注視していた深水ボート船団も加わって、中・深水ボート30隻あまりが「サンパン沖」の南西端の新漁場で操業することもあつた。その漁場も3ヶ月あまりで取り尽くされ、その年の採貝量は一隻当たり25～35トンと豊

漁であったが、貝質は良いものではなかったらしい。

3. 各漁場での操業

そうした操業水域の違いは単に真珠貝漁場の水深度の差異にとどまらない。浅水・中水・深水の違いは操業形態や操業技術の違いとしても具体化される。昭和期に入れば、いずれも潜水装置を装備した採貝船による操業であったが、海上の潮汐、潮流、風雨、海底地形にさらされる海上・海中での行動は操業域の深度によって異なっていた。浅水漁場は5尋～13尋ほどの水深での操業である。その中心的な操業域はトレス海峡西端に位置する「バトー沖」という広大な漁場（今日、オールド・グランドと呼ばれる）であり、最良質の貝が採取されることもあったが、長年にわたる操業海域であるために貝の棲息密度が低く、1時間の操業で10個足らずの成果であり、長時間丹念に作業することを強いられた。城谷氏によれば、広大な漁場の西の界限はバドゥ島東の隣島モアの最高峰373mのバウダル丘（英名オーガスタス山）が水平線に隠れるあたりとされていた。その東南部に位置しサンゴ礁の発達するモア島南部のロング礁海域、さらにその南部の今日の海図ではダラー・リーフと表記されている「アラケタ（アリゲーター）」漁場、さらに南東風の強い時期にはその風の風下に当たるヨーク岬西岸の「スモールレバー」やカーペンタリア湾の「メンダン（メインランド）沖」が主たる操業域であった。時には北部サイバイ島の南部に広がる「北沖」も組み込まれることもあった。

浅水漁場は、操業域としては比較的安全で、1日の潮汐や大潮・小潮といった潮流の差異よりも、海中の透明度が許すかぎり操業が続けられ、もっとも操業時間の長い漁場であった。周参見の瀧本庄太郎氏の日記によれば、朝5時半には操業が開始され、午前9時ごろと午後2、3時頃にパンと紅茶の昼食をはさむものの、夕方日が落ちるまでは操業が続行された。1年の操業期間は3月から翌年の1月までであるが、その大半は南東風の卓越する時期である。強風や逆に風ぎの折には操船の自由が利かず、また水深が比較的浅く、強風と大潮が重なれば、潮流が速く海水の濁りが激しくなり、操業を中止せざるを得なかった。

浅水海域での操業の様子は、城谷氏によると、東から西の満ち潮時には「取舵側（船首に向かって左舷）」から船尾（責任ダイバー）と船首（表ダイバー）の2人を潜水させ、主帆をたたんで半ば風をはらませ、「風上（風表）に船首をたてる」操船をしながら、船を「うたせる」作業をする。つまり、速い潮流の流れるままに船体を任せるのではなく、ダイバーの海底での作業に合わせるために速度をセーブするのである。海底の流速や澄濁度にもよるが、半径4、5mの範囲はみえても、2、3mの範囲で採貝する。ただ、潮流を心得て、うまく行動できるダイバーの技量の差もみられたらしい。浅水ではほぼ1時間前後このように採貝し、ダイバーをデッキに浮上させて、元の位置まで「潮上がり」して、再び潜水するのである。引き潮時の西から東への流れの時（彼らの間で<ウエンド>と称したらしい）は逆に船の面舵側（右側）からダイバーを潜水させたのである。

浅水の場合は単独で操業する船もあったが、中水ボートや深水ボートは全船団が集団行動するのが常であった。雇われた会社を横断する形で、単一や複数の同郷グループを統率するリーダーが決められており、その指示によって操業開始や終了、および漁場間の移動が行われ、冷気の増す7月・8月の海底にいる若いダイバーの中には、その指示が待ち遠しかったとその苦

労を語る者もいる。荒天時や濁水など操業を中止せざるを得ないときには、他の漁場に移動する場合もあるが、浅水グループはバドゥ島西岸の無人基地に船団を寄せ、カバ摺り（ダイバーボートの船体の喫水からキールにかけて、腐食や藻・牡蛎殻などの付着を防ぐために銅板（コパー）を張っていた。それが真鍮に変わっても

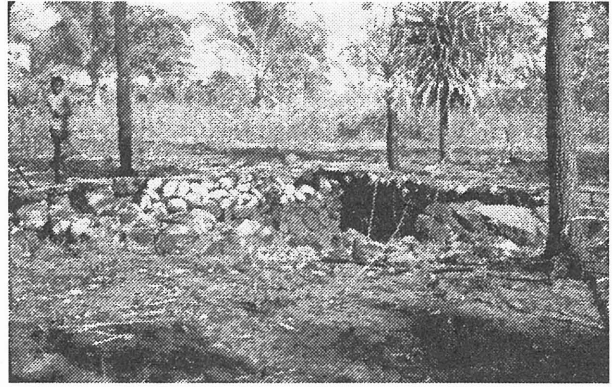


写真1 浅水漁場「バトー沖」に近いバドゥ島西部アルガンに周参見の人たちが掘った井戸

「カバ」と呼ばれ、その部分の掃除を行うことがカバ摺りであり、ボートの

走行を容易にした）や給水を行ったのである。バドゥ島西南部には島民たちがイアザとよぶ湧水池があり、また島西部のアルガンには明らかに日本人の石積みを思わせる掘り抜き井戸もあった。生前の藤井富太郎氏によると、かつて周参見の人たちが掘ったものだと言われていた。

中水ボートは当期中水漁場最高のダイバーとして著名であった三輪崎の竹中保市氏によって率いられた船団である。城谷氏によれば、当時一糸乱れぬ行動をとったという。ケープ・ヨーク北東沖のマンドルピン（当時の英語名マウント・アドルフス島の簡略化、先住民の間では、ムリと呼ばれる）漁場を中心に、海峡中央部のヤマ・アイラン沖（ヤム島南部）・サシー（ロング）島沖およびドガ・アイラン（ウォリア・リーフ南西部ザガイ島周辺部）、さらには西部のサンパン（英語サンド・バンクの訛り）沖とコクリョ（Cook Reef の訛り）・コクシヨ（Cook Shoal の訛り）が主要な漁場であった。雇われた企業は別だとしても（表1）、三輪崎の採貝船10隻あまりが操業においても移動においても休養においても一糸乱れぬ行動をとり、ほかの中水ボートもそれに従っていたようである。中水ボートは出稼移民の1大集団であった新宮三輪崎グループのダイバーが多く、先に述べた小芝菊松氏もその一員であった。中水ボートも操業時間を長くしようとしたが、15尋〜25尋の潜水作業では、エアパイプが船のスクリューに巻き込まれるなど複雑な潮流や海水の濁度の影響は著しく、潮流の比較的穏やかな小潮時一杯から大潮に入るまで操業を行い、大潮のピーク時のみ休養を取るのが一般的であったらしい。

深水ボートはこの真珠貝採取業において職業病ともいわれた潜水病にかかる危険を最も伴った漁場で操業する。トレス海峡における深水漁場はダーンレー・ディーブと呼ばれたが、別名ダーンレー・グレイブ（Darnley Grave）、つまりダーンレーの墓場でもあった。より正確にはダーンレー島南方のカリー・リーフがその漁場であるが、サンゴ礁が入り組み、海底地形も複雑であり、水深が急激に変わる小さな海溝も存在した。深水は30尋から40尋の深さであるが、40尋以上になると、潜水途中一時的に真っ暗になるが、底に着くとぼーと明るくなるらしい。40尋から45尋の深水では、10分前後の海底作業が精一杯であり、それでも、良いスポットに当たり、その水深での活動を心得た優れたダイバーであれば、一時に4畳半ほどの範囲で80個ほどの貝が採れることもあった（岡寄 1993）。浅水漁場では1時間の操業で10貝程度が平均値であるために、操業時間の長さで対応しなければならなかったのである。しかし、深水漁場においては、海底地形や潮流の複雑さのために、エアパイプのホースが岩礁に絡みつ

く危険性が高く、潮流の緩む時間帯でなければ操業できない。そして、何よりも水圧調節のために、下降中の「耳抜き」を複数回やらなければならないし、浮上中には水深 20 尋ほどのところで、真珠貝の詰まった貝袋（バイキ）を船上から降ろされる錘付きのロープにくくり、身軽になった上でライフラインを利用して水圧調節を開始し、30 分から 1 時間あまりをかけて、海面に浮上しなければならないのである。そのため、1 日 3 人のダイバーがそれぞれ 1 回潜水すれば、その日の作業は終わりであるが、作業中のライフラインにかかる重力やいつ起きるか分からない潜水病への懸念のために、船上のテンダーは気の休まる暇がなかったのである。また、深水ボートは潮流の弱い時期、つまり小潮時 1 週間しか操業できず、大潮時は近くのダーンリー島か、中部諸島のヨーク島ないしココナツ島で休養をとるか、木曜島に寄港して過ごしたのである。

真珠貝採取の操業は先にも述べたように、深水にあつては、潮流の弱い時期を選択しなければならないが、中水、とくに浅水にあつては、漁場では潮上で潜水を開始し、潮流にそって船をうたせ、潮下に移動しながら採取を行う。貝が比較的多く採取できる可能性があるならば、潜水したダイバーは潮上の場所にライフラインを 4 回引く合図によって責任テンダーに一斗樽や石油空缶に竹竿と旗をつけた錨付きのブイを下させる。潮下まで移動した船は再びそのブイをめざして「潮上がり」つまり潮上に船を寄せ、これを繰り返して操業を続けるのである。潮流に満ち潮・引き潮の方向変化があり、かつ波や風向との兼ね合いで船をブイに寄せるには船首のジブ・セイルや主帆（メイン・セイル）を巧みに操作する技術を必要としたのである。これは船上の責任テンダーの仕事であった。操業期間の大半は東寄りの風が卓越する時期であったが、満ち潮ならば、風向と潮流の方向が一致し、船の流される速度は速く、引き潮時には風向と潮流が逆方向になり、操船の巧みさが要求された。

後者のケースを海峡の日本人操業者は先にも述べたように「ウエンド」と呼んでいた。日本人操業者が在地の島人からその知識を得たかどうかは不明であるが、島人たちも、潮流の方向と風向とを合成して海峡におけるもっとも基本的な潮流をカテゴリー化している。すなわち、東寄りの風が卓越する時期にはそれと同一方向に流れる満ち潮を「クリス」、逆方向の引き潮を「グタット」と称し、他方西寄りの風が卓越する時期には、風向と一致する引き潮を季節や風の名称によって有標化した「クキ・クリス」、一方逆方向になる満ち潮を「クキ・グタット」と呼ぶのである。日本人と島人の環境認識が別起源のものだとすれば、同じ海上・海中での活動にたずさわる者たちの間で、その経験から同一のカテゴリー化が行われたことは興味深いことである。

さらに真珠貝漁業における操業上での日本人と島人との海洋環境の認識に関して付け加えれば、島人たちが日本人から取り入れた文化的な要素は多かったが（Shnukal 2004）、一方日本人の方でも、操業中に彼らの海洋環境に関する知識から流用した側面もみられる。日本人の採貝船に雇われていた島人たちは一方的に雑役夫や賄い人としてのみ活動していたわけではない。操業中にも、悪天候や大潮・風気で操業できないときには、ウミガメの捕獲、ウミガメの卵の採集、ジュゴンの捕獲など、島人の知識や技術が大いに役立ったのである。バドゥ沖やメンドン沖では、しばしば釣りも行われたのであるが、毒を有する魚類の選別も島民たちの知識に頼っていたのであった。

4. 労働集団と故郷

最後に、明治末から第2次大戦まで、他のマレーやフィリピンなどのアジア系、あるいは南太平洋系の移民たちを凌駕して、真珠貝漁業はほとんど日本人の独占的な職種になった一因について付け加えておこう。1隻の操業集団の構成は白人企業家から「借船」する責任ダイバー、補助的な表ダイバー、それにそれぞれの責任テンダーと表テンダー、機関士、賄い人(クック)、さらに船中での雑用乗組員として2人の島人であった。前節まで述べた海洋環境に関する知識や操業の技術、さらに仕事の勘はそうした集団の中で教育され養われていったのである。

もちろん、それらの職種は単なる役割分担ではなく、給料体系をともなった職階制でもあった。15才から20才あたりで故郷から「呼び寄せ」られ、賄い人として操業集団に組み込まれていく。給料は最低であるが、朝というより夜中の午前2時、3時に朝食の準備のために起床し、5時前後の朝食と昼食用のパンの仕込みの準備をしなければならない。新来の出稼者は1年後、あるいは2年後、表テンダーか、機関士か、あるいは表ダイバーの見習いとしてその階梯を歩もうとする。故郷において、ダイバーたちの潜水病による死亡や身障者に至る危険度のゆえに、「博打とダイバーだけはするな」と親から言われて、それを守る者や体質上潜水に合わない者をのぞけば、ダイバーへの道を歩もうとする。労働条件は賄い人や機関士が一番厳しく、ダイバーともなれば、死の危険は伴うものの、その体調が潜水病への罹患にも深く関わると思われていたので、船上でも潜水以外の仕事は一切しないし、貝の積み下ろし、食料の調達、また休漁期(レイ・アップ)に木曜島に立ち寄る際には、ダイバーは木曜島にあるそれぞれのボーディング・ハウス(寄宿舎)で休養を取るのである。そして、給料は最も高い。それゆえに、ダイバーになろうとする若者たちはあとを絶たなかった。もちろん、ダイバーの中にも貝採取の優劣はあり、「ソースパン・ダイバー」と揶揄される者もいたらしい。潜水用のヘルメットの「釜」を被るよりも、クックとして鍋釜を扱っているほうがお似合いだという意味である。

しかし、責任ダイバーや責任テンダーは操業集団の統率力も要求され、逆にそのことは若者たちの面倒見の良さにもつながっていた。それゆえに、海峡での仕事を終え、故郷に帰ったあとでも、操業地での人間関係は持続され、出稼地での人間関係はそのまま故郷の地においても有効な社会システムであった。出稼地で真珠貝漁業に携わった者は、その就労環境や労働の艱難辛苦ゆえに、故郷の地での労働は容易であると振り返る者も多かったらしい。それゆえに、若者たちが多少の夢と現金稼ぎの目的で渡航した真珠貝漁業は実質的な成人儀礼であったと言えなくもない。

オーストラリアにおいて、真珠貝採取操業船のライセンス取得を白人に限定した法律の枠内で工夫された「借船制度」は操船・操業・海域の環境認識もふくめ技術と勘の訓練とその継承を操業集団に依存し、白人企業側にすれば、自らがその費用負担を被ることはなかったのである。20世紀への変わり目以降、ダイバーと真珠採貝漁業はほとんど日本人契約労働者の独占といってよい状況下に置かれた。その理由を生理的な特質や危険にさらされながら得られる高収入に帰される見解もあるが、それと並んで出身地(村)を同じくする同郷集団による労働編成と当時の僻遠の日本人社会にあった社会システムがそのまま真珠貝漁業の場にも持ち込まれ、また出稼後故郷の地に帰ったあとも真珠貝漁船上の職階制や上下関係がそのまま故郷の村社会

の中で機能し得たことも大きな理由であったといえよう。

参考文献

- Ganter, G. (1994) *The Pearl-Shellfishers of Torres Strait: Resource Use, Development and Decline, 1860s-1960s*, Melbourne University Press.
- 久原脩司 (1983) アラフラ海における採貝出稼初期移民の研究—和歌山県人を中心として—、大島 襄二編『トレス海峡の人々—その地理学的・民族学的研究—』 532-546、古今書院。
- 大島正満 (1927) 木曜島附近の真珠採取漁業、理学会 24-2、5-13。
- 岡寄圭史 (1993) オーストラリアでのダイバー 歴史と民俗『ありだ』第5号、81-92。
- 小川 平 (1976) 『アラフラ海の真珠』 あゆみ出版。
- 松本博之 (1981) トレスの人と人と 季刊民族学 5-1、88-95。
- 松本博之 (2003) 先住民の海洋資源利用と国民国家の管理—オーストラリア・トレス海峡諸島民の ジュゴン貝を事例として、岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』 国立民族学博物館調査報告 46、299-343。
- シソズ, D.C.S. (1974) 1971-1946 年のオーストラリアの日本人 移住研究 10、27-54。
- Sissons, D.C.S.(1979) The Japanese in the Australian Pearling Industry, *Queensland Heritage* 3-10, 9-27.
- 城谷 勇 (1993) トレス海に生きた日々 歴史と民俗『ありだ』第5号、1-48。
- 高山伊太郎 (1937) 『世界主要地における真珠介漁業』 南洋庁。
- 和田清治 (1953) 『シロチョウガイとその漁業について (Biology and Fisheries of the Silver-lip Pearl Oyster) 』水産増殖叢書 No.1、東京大学農学部水産学科。
- Shnukal, A. et. al. eds.(2004) *Navigating Boundaries: The Asian Diaspora in Torres Strait, Pandanus Books.*

Supplementary to the Pearl Shell Fishery Studies in the Torres Strait

MATSUMOTO Hiroyuki and JOTANI Isamu

キーワード : 真珠貝漁業、真珠貝漁場、海洋環境、日本人労働者、トレス海峡

Key Words : pearl shell fishery, fishing ground, marine environment, Japanese labourer,
Torres Strait